



島内武彦先生

宮沢辰雄（生化）

島内先生は昭和16年3月に理学部化学科を卒業、21年11月に化学科助教授、34年4月よりは教授として物理化学第一講座を担当されて教育と研究につくされた。とくに分子分光と分子構造の分野で重要な業績をあげられ、そのうち、「赤外線吸収スペクトルによる分子構造の研究」で日本化学会賞（39年4月）、「多原子分子の力場の研究」で日本学士院賞（47年6月）を受けられた。また、47年よりは大

型計算機センター長（併任）として、大きな貢献をされたが、この3月限りで東京大学では定年にられる。

わたくしは、水島研究室で卒業実験をはじめた24年4月より7年間あまり、直接に島内先生の御指導を受けた。研究室における先生はいつも笑顔（写真）で、研究計画などで御相談にいくと、「ああいいぜ」といわれるのが常であった。わたくしどもが伸びや

かに生長する(かもしれない)を励ましつつ見まもって下さったらしい。これは、ずいぶん寛大な教育方針であったと思う。

新しい意外な実験結果には、先生はとくに強い関心を示された。予期どおりにならなかったときには、「うん、おもしろいね」といわれていっしょに考えてくださった。意外な事実の発見こそ、化学に新しい発展をもたらすものとして重要視されたのである。これとも関連するが、先生は目的志向型の研究よりも、なるべくとらわれない自由なふんいきでの研究をすすめられた。ひとには決して威圧的でなくて大らかであり、いわゆる効率をあげるよりはむしろ、真に新しい成果の生まれることを念じておられたように思われる。

研究を大いに楽しむのが先生のやりかたである。分子構造モデルも大好きで、紙細工で回転異性体のモデルを作って、研究発表のときにも利用された(写真)。そのつぎは、プラスチック細工のモデルで、電気陰性度に応じて原子を色わけし、内部回転できるようにしてある(大きくて見やすいので講義用に適している)。研究成果の発表も、気負ったところはなく、とても楽しそうで(写真)、聞いていてわかりやすかった。

かなり強い自信をもって先生は、みずからの独特の研究方法で邁進された。その基調は基準振動計算であって、これによって、赤外吸収とラマン散乱スペクトルを解析し、分子と結晶の構造(原子配置と

調和ポテンシャル)を明らかにすることである。当時の水島研究室では、中川一朗君(現在は東北大学教授)も振動計算のプロであった。手まわしの計算器で行列(5次ぐらいまで)の固有値問題を解くのである。後に電動式になるとともに、計算もエスカレートし、9次の行列をいくつも扱うようになった。これにはかなりの日数を要したが、ともかくやりおさせたのは、島内先生の暖かいはげましのおかげである。

その後、先生は物理化学第一講座を担当され、わたくしは大阪大学に移った。先生は、「とにかく大いに仲良く、また活潑に意見を交換して東西で研究を進めようではありませんか」といわれたが、実際に先生は、学会では振動スペクトルの研究のますますの発展のために、積極的(生産的)なコメントをされ、またみずからもしばしば研究発表をされた。

46年3月、生物化学教室では四人の教授が定年退官されることになり、島内先生はその後の人事選考の世話をしておられた。わたくしは生物化学教室に来ることになったが、先生は教室の再建のために協力してくださった。

最近の先生は大型計算機センターの充実と利用のために努力をつくされ、それとともに、学術情報を学問研究に役立てるために新たな意欲でとりくんでおられる。先生はまもなく定年になられるが、今後ますます健康に、そして大いに楽しみながら、新たな仕事に独創性を発揮されることを期待している。